

「BRICs に次ぐ新興国と日本の関わり」～ 千葉県経済同友会での講演 ～

2011年4月14日

千葉県経済同友会 会報の2010年6月号に、4月6日(火)ホテルスプリングス幕張での講演が掲載されました。

ご興味のある方は、ぜひご覧ください。

大喜多 富美郎

2010  
6  
Jun

CHIBA ASSOCIATION OF  
CORPORATE EXECUTIVES

千葉県経済同友会  
会報

**マレーシア・シンガポール視察** …… 2ページ

- 団長所感
- マレーシア・シンガポール視察報告
  - マレーシア経済事情：レクチャー
  - ロイヤルセランゴール・ビジターセンター：視察訪問
  - マリナー・ベイ・サンズ：視察訪問
  - リゾート・ワールド・セントーサ：視察訪問
  - マレーシア概況
  - シンガポール概況

**4月例会** …… 12ページ

- 「BRICsに次ぐ新興国と日本の関わり」  
オフィス オーキタ代表 経営コンサルタント 大喜多 富美郎 様

**5月例会** …… 20ページ

- 「人口減少社会の企業経営」  
政策研究大学院大学 教授 松谷 明彦 様

第23回全国経済同友会セミナー（土佐） …… 22ページ

懇親ゴルフコンペ …… 22ページ

圏央道 総会 …… 23ページ

会員の異動 …… 23ページ

千葉県の経済動向 …… 24ページ

## 4月例会

# 「BRICsに次ぐ新興国と日本の関わり」



オフィス オーキタ代表  
経営コンサルタント

おおきた ふみお 様  
大喜多 富美郎 様

4月6日(火) ホテル スプリングス  
幕張において大喜多様をお迎えし、  
「BRICsに次ぐ新興国と日本の関わり」  
と題してご講演をいただきました。

ご講演の要旨は以下の通りです。

皆さんこんにちは、大喜多です。私は1972年に丸紅という商社に入りまして約30年間、前半はイラクを中心とした中東、後半はアジアで開発建設関係の仕事をしていました。今から8年前に独立いたしました、主に中小企業の方々が海外に出でいかれる、もしくは海外で仕事をされるという時のお手伝いをさせていただき仕事を始めております。

私は、BRICs以外のもう少し小ぶりな新興国というのが一番得意な分野でございまして、本日は「BRICsに次ぐ新興国と日本の関わり」というテーマでお話させていただきたいと思っております。本日のアジェンダですけれども、最初はBRICsとその他の新興国ということでお話させていただきます。次に2050年に世界経済がどうなっているかということについて、新興国とG7とを比較しながらお話をさせていただきたいと思っております。3つ目に、私は去年の11月から今年の2月まで、ベトナムのホーチミンにある二つの私立大学で日本企業文化という講座をやらせていただいておりますので、日本企業文化についてベトナムの若い人たちがどうしているのかということをお話したいと思います。

では、まず始めにBRICs4カ国についてお話を

します。今から約10年前に、ゴールドマンサックスという投資銀行の研究者がブラジル、ロシア、インド、中国の4カ国の中で、2010年までにG7の国に追いつく国が出てくるかどうかと、そういうスタディをいたしました。その時の検討結果は、これらの国が2010年までにG7の国に追いつくのはちょっと無理だろうという結論だったのですが、その後2000年代の前半に、物凄い勢いで中国、インドが伸びてきたので、2004、5年頃にゴールドマンサックスが再度見直しを行いました。その時には、中国は2010年までにはドイツを追い抜くだろう、日本も10年代の初めまでには追い抜かれるだろうというような予測になりました。しかし、現実はそのよりもっと早く、中国は2008年にドイツのGDPを追い越しました。さらに中国は2010年には間違いなく日本のGDPを追い抜くだろうといわれています。

次に、本日のテーマのBRICs以外の新興国ということですが、ゴールドマンサックスが、2005年から2008年ぐらいにいろいろスタディをして、このBRICs4カ国に続く国にはどういふ国があるのだろうかという研究対象に、11カ国を抽出しました。その11カ国というのは、メキシコ、韓国、フィリピン、インドネシア、ベトナム、バングラディッシュ、パキスタン、

イラン、トルコ、エジプト、ナイジェリアで、いろいろな国が取り上げられています。もちろん、彼らも11カ国全てがBRICsと同じように大きくなるといった予測をしているわけではなくて、伸びる要素があるだろうと考えた国を対象として分析した結果のレポートを出しています。我々はそのレポートの中身を吟味、スタディして本を書いたりしていたのですけれども、これがわたしの一番得意なBRICsに続く可能性のある新興国、「NEXT 11」です。BRICs以外の新興国というのはいろいろな捉え方があり、ベトナム、インドネシア、南アフリカ、トルコ、アルゼンチン、この頭文字を取ったVISTAなどというグルーピングもあります。

さて、BRICsに戻りますが、中国は世界で最大の約13億人の人口があります。GDPは4兆8千億ドルぐらいです。日本が今、5兆ドルちょっとですから、近いうちに間違いなく追い越されます。一方で、一人当たりGDPは中国が3,500ドルぐらいで日本は4万ドル弱ですから、今は10分の1ぐらいです。ただし、中国はGDPの成長率が8.5%程度を維持しています。

BRICsの中で、次に大きな国で活力のある国がインドです。BRICsの中では一番国土が小さい国になりますが、人口は中国に次ぐ12億人に到達してしまいました。中国の人口は2010年代の終わりぐらいには伸びるのが止まり、減少方向に入るといわれておりますので、2020年代には、インドが世界で一番人口の多い国になると思われれます。GDPは中国と比べても4分の1程度の1兆2,000億ドル、一人当たりGDPになると、1,000ドルぐらいですから、まだまだ一人一人がたくさん稼ぐ力がある国ではありませんが、2008年、2009年あたりの世界が非常に苦しんだ時にもプラス成長を維持しておりますので、伸びている国であることは間違いありません。

ブラジルは、もともと技術力のある国ですし、最近石油やガスなどがずいぶん出てきています。GDPは1兆5,000億ドル、一人当たりGDPは7,700ドルと、新興国の中では上の方の数字です。ただ、中国やインドと比べると人口が少なく内需だけでは依存できないので、やはり世界経済が悪くなってくると少し成長率も落ちてきています。

ロシアは、国土は世界で一番大きいのですが、人口は1億4,000万人、GDPがBRICsの中では一番小さく1兆2,500億ドルですが、一人当たりGDP

は8,800ドルあり、BRICsの中では一番です。ロシアが2000年代に伸びてきた最大の理由は石油・ガスの値上がりでしたが、それが2008年の後半から値下がりがした影響を大きく受け、GDPの成長率はマイナスとなっています。

ご参考までに日本を見てみますと、人口が1億2,800万人、GDPが約5兆ドル、一人当たりGDPが約4万ドルです。去年のGDP成長率はマイナス5.4%という数字になっています。

さて、次にNEXT11の国をみますが、この中にOECDに入っている国が三つあります。OECDというのは、かなり先進国グループといえるわけですが、その一つとして韓国があります。人口はこのNEXT11の中でも一番小さくて4,900万人。一人当たりGDPは16,450ドルと、BRICsのロシア、ブラジルと比べても倍ぐらいあります。ただし、人口が5,000万人にも満たないので、全体としてのGDPは小さくなっています。

メキシコは、韓国と同じぐらいのGDPです。人口は1億人いるので一人当たりGDPは、韓国の半分ぐらい。メキシコ経済というのは石油の輸出も含めて、アメリカ経済にかなりリンクしている部分がありますから、去年の成長率はマイナス7.3%になりました。

もう一つ、OECDに入っている国でトルコ。アジアの日本と反対側に位置する国で、日本側から見ると、ヨーロッパの入り口になりますが、人口が約7,000万人、GDPが6,000億ドル、一人当たりGDPが8,400ドルです。2007年には、一人当たりGDPで1万ドルを超えましたが、リーマンショックの影響を強く受けて、去年のGDP成長率はマイナス6.5%です。

それから、今日の最後にお話したいと考えているベトナムという国はNEXT11の中で、メキシコ、韓国に次いで、トルコと並んでこれから伸びるといわれている国なのですが、人口は8,700万人、GDPはまだまだ小さくて1,000億ドルにも満たない状況です。一人当たりGDPも1,000ドルをやっと超えたところですから、インドと同じぐらいです。ただ、GDPの成長率はここ数年低下していますが、それでも4.6%は達成している、そういう国です。

アジアの中でもう一つ押さえておいていただきたいのはインドネシアです。日本ともいろいろ関係の深い国ですけれども、人口は2億3,000万人、GDPが約5,000億ドル、一人当たりGDPが約2,200ドル。

## 4月例会

### BRICsに次ぐ新興国と日本の関わり

中国とインドの間ぐらいの感じの国です。GDPの成長率は、やはり4%を確保しています。人口が2億人以上の内需の大きな国であるということと、石油・ガスなどの資源産出国ですから、多少景気が悪くなっても、かなりの成長は期待できる国になっています。

もうひとつ、最近話題になっているイランです。核開発の問題とかいろいろ話題になっていますが、イランはOPECの中でも上位に位置する石油の産出国です。天然ガスの埋蔵量はロシアに次いで世界第2位です。ですから、エネルギーという部分では非常に安定した力を持っていて、今は経済制裁を受けたりしてなかなか成長できないのですが、10年、20年の単位で考えれば当然落ち着いてくるでしょうから、注目しておくべき国だと思います。

この部分のまとめとして、BRICsというのはどういう国かといいますと、一つは間違いなく人口が多いし、国が大きい。もう一つは、それぞれの国が資源大国です。それから、この4カ国はもともと技術の蓄積があります。かなり前から中国もインドも自前で自動車を作っていました。ロシアも自前で自動車を製造して東欧圏とか中東に輸出していました。ブラジルも1970年代には国内で自動車を造ってヨーロッパや中東に輸出していました。さらには、この4カ国は大きな国であると同時に、歴史的にそれぞれの地域でかなり中心になっていた国ですから、それぞれの人たちの資質も決して悪くないというか、優秀な人材がかなりいるのだと思います。ということで、BRICsはこの10年、物凄い勢いで伸びてきました。

それに次ぐグループとして、私たちはNEXT11というのをグルーピングしているのですけれども、全体に共通するのは人口がある程度多い。この11カ国の中では韓国を除くと、みんな7,000万、8,000万以上の人口のある国になりますから、人口が多いということは少し成長すると、それが量的には物凄く大きくなるということです。ですから、潜在的な成長力も高いのだろーと思います。それ以外の部分については、それぞれの国にみんな特徴があって、ある意味からすると、玉石混合、まだまだ原石という国もあります。例えばバングラディシュなどは、世界の最貧国から抜け出しておられませんし、まだしばらくは変わらないのではないかと思います。パキスタンも政治的にいろいろ問題が多い国です。

次に、過去10年とこれから4、5年の経済成長率

です。日本やアメリカは、いい時でも4%、悪くなるとマイナス5%を超えてしまうというような感じです。先進国はだいたい同じような数字です。プラス5%成長というのはなかなか達成できません。一方で、中国はずっと8%から10%前後です。ブラジルは多少の変動はありますが、それでも5%を超えている年がかなりあります。そしてベトナムは7%から悪くても5%前後のところで安定しています。インドネシアも5%以上の成長力はあるのだろーという感じです。トルコは先ほど申し上げましたようにヨーロッパとビジネス上の関係が非常に強いということで、リーマンショックの影響を大きく受けています。2000年の初めには、トルコ自体の金融危機というのが起きて、かなり影響を受けました。その後、現政権になって割合安定して成長していたのですが、リーマンショックでまた痛い目にあいました。

次に2050年の世界を見てみたいと思います。2009年のG7、BRICs、NEXT11のGDP総額を並べてみますと、やはりアメリカが突出して大きいです。次いで、その2.5分の1ぐらいのところに日本がいて、そのすぐ後ろに中国がいます。それからドイツです。順番としてはG7がいて、中国がその中に割り込んできて、その後ろにBRICsがいて、NEXT11の国はその後ろといった感じです。

これが2050年にどういうふうになるかの予測をみますと、中国がアメリカを遥かに抜いて倍近くになっています。インドもアメリカ並みになります。日本は量的にはインドネシアにも抜かれます。日本だけではなくて、G7の国がみんな新興国に抜かれてしまうというような予測になっています。これは、中国の人口がこのままどんどん伸びて、食料問題が大丈夫なのかとか、環境問題がどうなのかとか、そういう不確定要素がたくさんあるとは思いますが、13ぐらいの項目を分析をして、さらに細分化して成長率を予測していますので、一つの考え方としては、こういうふうになる可能性がそれなりに、もしくはそれなり以上にあるということはいえるのではないかと思います。

一人当たりGDPで考えてみると、2007年のBRICsの一人当たりGDPは、それほど大きくはありません。韓国も日本の半分以下です。これが2050年にどうなるかという、さきほどのGDP総額とその頃の人口予測から計算してみると、アメリカが一番大

## Monthly meeting

きくなります。それから、韓国が一人当たりGDPではかなり伸びるだろうという評価をされています。いろいろな形で韓国の経済的な戦略というのが評価されているのだと思います。それからロシアも伸びてきます。日本は2007年と2050年でそれほど変わらない位置にいますけれど、後ろから新興国が近づいてきます。差がどんどんなくなってくるだろうという予測です。

では、いつ新興国がGDPでG7を超えていくのだろうかということ、中国は2008年にドイツを抜きました。2010年には日本を抜きます。インドは2030年の前には日本を抜くだろうといわれています。先ほどの分析からいきますと、メキシコも2045年の前には日本を抜いてしまいます。インドネシアにも抜かれます。日本は現在、世界第2位の経済大国だといっているのですけれども、2050年まで見ると、そうはいかないような世界が目の前に来ているということです。以上、2050年の世界の予想ということでお話をさせていただきました。

最後に、新興国の中でベトナムについてお話をさせていただきたいのですが、ベトナムの情報というのは、

5年ぐらい前からずいぶん日本でも報道されるようになってきました。それからチャイナプラスワンの有力な国であるということも言われておりますし、日本政府との関係もどんどん深まっていますので、経済上の情報というのは皆さんよくご存じだと思います。

ベトナムというのは、南北に長い、日本とよく似た感じの国です。首都はハノイです。元々の商業の中心はホーチミン、それから真ん中にダナンという港町があります。このハノイからホーチミンまでの鉄道があるのですけれども、1,700キロぐらいあります。この高速鉄道を日本政府が支援する話が進んでいます。少し前の日経新聞の朝刊の一面に、日本政府とアジア開発銀行、それから東アジアの政府が協力して、これから約2000億ドル、18兆円を使って、インフラ整備を進めるという計画が載っていました。東南アジアを、フィリピンとインドネシアを含んだ南部諸島グループ、タイを中心にしてインドまでつないでいくメコン・インド圏、インドネシア、マレーシア、タイを含んだIMT圏、それからベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマー、中国南部を含んだ大メコン圏という4つのグループに分けて、この4つのグループのインフラをもっと整備していこうというものです。この中でベ



## 4月例会

BRICsに次ぐ新興国と日本の関わり



ナムに一番関係しているのは、大メコン圏という部分にですが、大メコン圏はベトナム、カンボジア、ラオス、タイ、ミャンマー、中国の雲南省、それから広西チワン族自治区の5カ国と2つの地域と合わせたエリアです。この大メコン圏のインフラを整備してビジネスを拡大していこうという取り組みを90年代から始めていて、少しずつ結果が出てきています。大メコン圏という名前はメコン川からきています。メコン川は中国の青海省からずっと流れてきて、ベトナムから南シナ海に出ている大きな川ですが、その流域の5カ国2地域の特に陸上輸送と電力、通信、その他観光開発なども進めたいということで、アジア開発銀行が中心となって大メコン圏開発プロジェクトを進めています。この地域の総面積は日本の6.8倍、人口は日本の2.5倍ぐらいになります。まだまだGDPの総額では日本の10%にも満たないのですが、これからの成長力は大きいだろうという地域です。

その大メコン圏の中心になるであろう国がベトナムです。ベトナムという国の概略をちょっとお話しますと、面積は33万km<sup>2</sup>で日本のおよそ8割ほどです。人口も8割ぐらいです。GDPは50分の1程度です。一人当たりGDPは40分の1程度ですが、2000年以降、

かなり成長しています。

ベトナムの経済解放政策、ドイモイ政策が1986年頃始まりました。その時期、ベトナムの社会主義経済政策がなかなかうまくいかず、カンボジア問題で制裁を受けていることもあり、経済が回っていかなくなってきていたのですが、ベトナム政府が経済の開放政策を始めて、少しずつ上向いてきました。それから、また政治問題とか周辺の東西冷戦が終結したことによる影響などで少し景気が低迷したのですが、パリ和平協定が90年代の初めに成立し、国際的な経済制裁が解かれ、日本を中心としたODAもどんどん入ってくるようになりました。諸外国からの直接投資もさかんで、ホーチミンを中心に、大手電機メーカーなど日本の企業がベトナムに進出しました。しかし、1997年にアジア経済危機が起こり、ベトナムはその段階では直接的な影響はそれほどなかったのですが、周辺の国が悪くなるにつれ、ベトナム経済も悪化していきました。その後2000年から2001年頃、第二次投資ブームが起こるのですが、このきっかけは、キヤノンさんがハノイに工場を造ったことです。それまでは、日本、韓国、台湾からの投資はほとんどが南のホーチミン周辺だったのですが、北の方にキヤノンさんが

立派なプリンタ工場を建てられ、それに引っ張られてサプライヤーさんとか、その他の工場も数多く進出してきました。現在では、キヤノンさんの関係だけで、ハノイとその周辺に100社ぐらいは進出しているといわれています。それで、ベトナムの景気もよかったです。リーマンショックでやはり投資がかなり落ち込みました。落ち込んだといっても経済成長率は4.5%とかそういうレベルです。5%から8%の成長力がずっと続くだろうというのがIMFの予測です。

次に、ベトナムの良い点、悪い点というのをお話したいと思います。強みという、共産党の一党独裁で、政治的には非常に安定した状態にあります。市場経済化されていますので、ビジネスはかなりやりやすい環境になっています。投資環境も法整備が進んでいます。そのうち人口が1億人になるといわれていますから、中国やインドには及びませんが、かなり大きなマーケットといえると思います。地理的には中国とアセアンのちょうど入口、接点にあります。また、天然資源が結構あり、石油、石炭、鉄鉱石などが取れます。石油については、原油を輸出して製品を輸入しているのが現状ですので、エネルギー収支は赤字になっていますが、去年あたりから製油所の建設工事が始まっていて、近いうちに製品を輸入するということもなくなってくると思います。ただ、今のところはまだまだ農業国です。米とコーヒー、それからゴムというのが主な輸出品で、米はタイに次いで世界第2位、コーヒーもかなり差はありますがブラジルに次いで世界第2位の輸出国です。ベトナムで特筆すべきことは、勤勉で優秀な労働力、識字率が高くて、教育熱心であり、比較的安い労働コストです。労働コストは少しずつ上がってきて、あまり安いとはいえなくなってきましたが、それでも中国の南部やタイと比べるとまだまだ低コストです。また、ベトナムのワーカーですが、ワーカーの手先の器用さ、目のよさがあり、それから独創力とか発想力には欠けるけれども、ここからここまでこういうふうにやりなさいと教えたらちゃんとやります。ある日系企業の社長さんは、この方は中国やタイ、インドネシアでもいろいろ仕事をされた方なのですが、ベトナムのワーカーは世界一じゃないかとおっしゃっていました。私も世界一に近いと思います。非常によく働きますし、やるべきことをちゃんとやる。ただ、労働争議が時々起こります。

弱みという、インフラがまだまだ整備されていな

い。それから人材の不足があります。管理職になる人たちが不足しています。産業が未発達だとか、財政赤字だとか、物価上昇率だとか、いろいろと弱みはありますけれども、この辺は途上国では一般的な問題だと思います。

先ほどのところに少し戻りますが、ワーカーは非常に優秀です。コスト対比でも非常にいいと思います。逆にワーカーを集めるのが都市部では難しくなりつつある状態です。

また、仕事を任せられるような管理職を集めるのに、みなさん苦勞されています。ベトナム全体では、専門学校、短大、それから大学、大学院に進学している人たちは、平均すると15%ぐらいだという数字が出ていますが、その中でも専門学校とか短大の比率はかなり高いでしょうから、おそらく大学に行っている人は5%から7%程度の比率ではないかと私は推測しています。こういう人たちが日本企業でしっかり働いてもらえるようになるのは、非常に重要ではないかということで、日本政府のODAで3ヶ月ぐらい行かせていただいて、ホーチミンの学生さんたちに日本企業文化という講座をやりました。

「日本企業文化 ～日本のこころ・ものづくりのこころ」という講座をやったのですが、こころという題材で大丈夫かなと、自分でも思いながら始めました。日本企業文化ですから、当然、日本文化の上に成り立っています。それから個々の企業というのは、企業文化をそれぞれが持っていて、その企業文化の上に企業の目標があり、その目標を達成するために戦略とか戦術を考えます。それらを実現するために、5Sとか改善とかQCサークルとかをやるのですよといって授業を始めました。日本語学科、すなわち日本語を勉強している学生が8割ぐらいでした。日本の企業で働きたいと思っている人たちが多かったということもあるのですが、5Sを教えてくださいとか、QCサークルってなんだろうといった質問が多かったので、その前にまず日本企業文化を学びましょうと始めたわけです。日本政府はいろんな形でODAをやっておられて、かなり高度な講座もやっておられます。だからこそ、ベースとなる日本企業文化というのをやってよかったと、私は思っています。

文化という非常に漠然とした話なので、理解してもらうのに物凄く苦勞するだろうと思い、最初にキーワードを3つ提示しました。日本企業を理解するようなキー

## 4月例会

BRICsに次ぐ新興国と日本の関わり

ワード、これはいろいろな方のご意見を聞きながら作ってみたのですけれども、まずはチームワークだと。ベトナム人はこれがかかなり弱いといわれています。彼らもそう思っています。それから、結果だけじゃなくて、プロセスが非常に重要だということ。最後に「ものづくりのこころ」としました。もともとが難しい題材ですから、アプローチとして日本語で「もの」というのは、物だけじゃなくて、人も「もの」だし、それ以外にもいろいろな「もの」があるところから始めました。

全部で13回のカリキュラムでしたが、ポイントは事例を数多く入れたことで、これが学生にはわかりやすかったようです。事例の中の一つで非常に好評だったのは、ベトナムの日系企業で働いているベトナム人幹部の人たちにパネルディスカッションをやってもらいました。ベトナム人にとって日系企業で働くということはどういうことかというテーマだったのですが、この人たちが盛んに言っていたのは、日本の企業に入ったら、ちゃんとみんな育成してもらえると、だから必要なスキルは教えてもらえるし、5Sにしても、QCCにしてもちゃんと教えてもらえるということでした。逆に言うと、ベトナムで仕事をやっていく上では、そういうことをしっかり教えていかないと、なかなかオペレーションがうま

くいかないのだろうなどは感じました。13回目の講座が終わったあとに修了式をやったのですが、その中で学生の代表に、この講座を終えてのプレゼンテーションをやってもらいました。私はこういうふうにしっかり捉えてくれているとは思っていませんでしたのでびっくりしました。その一部をご紹介しますと、「このような驚異の経済発展を、作ったのは日本の物づくりの心だと思っています。日本の物づくりの心とは、・・・(中略)・・・効果的な生産の管理方法などの要因のほかに、日本の物づくりの一番大切な要因は、人材育成です。つまり、日本の物づくりの心と言うのは日本人だけでなく、私たちの一人一人にもあるものなのです。・・・(中略)・・・それから、日本が今、こんなに発展しているのは、日本人一人一人が自分の仕事を大切にしているからだと思っています。私たちは自国を発展させるために、一生懸命働こうではないですか、そうすれば、あなたがやってきたことよりもっと多くのことが得られるでしょう。」

自分で講座をやっているながら、我々が忘れていたことを思い出させてくれるなあという気がしまして、このプレゼンテーションには感動しました。こういうことを考えているベトナムの若者がたくさんいるということ





## Monthly meeting

を、日本の人たちにもできるだけわかってもらえればいいなと思いました。

それからベトナムの人口ピラミッドですけども、本当にピラミッド型になっています。最近ではだんだん都市化されてきて、子どもが二人という家庭が多くなってきましたので、安定している感じになっています。それから、60歳前後の、特に男性が減っています。これはベトナム戦争の影響だと思います。日本で非常に多い年代ですけども、反対にベトナムでは足りなくなっています。日本の人口ピラミッドと比べてもずいぶん違います。やはり若い国です。おそらく平均年齢は26、7歳だろうと思います。

日本は、21世紀になっても未だに経済的にも政治的にも非常に苦勞していて、国際的に存在感がどんどん薄くなっているという気がしています。私が初めて外国に住んだのは、1977年に会社からアラビア語研修生としてシリアのダマスカスに派遣された時です。その当時、シリアや周辺のアラビアの人たちは、ほとんど日本を知りませんでした。少なくとも意識はしていませんでした。それから日本が経済発展するにつれて、日本のプレゼンスというのは大きくなってきたのです。しかしこのままでは、昔に逆戻りしてしまうのではないかと感じております。やはり、日本はもう少し外向きに考えなければならぬのではないかなということも含めて、私の考えを最後にちょっと申し上げます。

20世紀というのは、日本が19世紀の後半の明治維新から近代化、西洋化していった、日清戦争を経て、2002年の日英同盟、日露戦争を経て、世界史の中に日本という存在が出てきた時代だと思います。ただ、いろいろなことがあって、その後の日本はあまりいい方向に行かずに崩壊し、占領されてしまいました。でも、そこからみんなの頑張りでも世界第2位の経済大国にもなり、一時は、21世紀は日本の時代だといわれたこともありました。

21世紀になって、いろいろな意味で混沌としている状態になって、これからどのような世界になっていくのかなというところですが、これからの世界は中国とアメリカのG2になるという人もいますし、どんどん多極化していくんだという人もおられます。これはどうなるかはわかりません。ただ、そういう中で日本の歩む道を考えなければなりません。NEXT11の中で、日本を好きな国というのは結構多いのです。インドネ

シアやベトナムはかなり日本の方を向いています。トルコ、これは世界でも有数の親日国です。それからイラン人も日本人の方を向いているような気がしています。エジプトとかナイジェリアはよくわかりませんが、いずれにしても、世界には日本の方を向いてくれる国がたくさんあって、その多くがこれから新興国として伸びていこうとしている国々です。そういう国が日本に対して関心を持っているわけです。ところが、日本がそういう国に対してどれだけ関心を持っているかというと、残念ながら日本が向いている方向というのはアメリカであったり、ヨーロッパであったり、中国であったり、なかなかこういう小さい国に関心が向いていかない。先進国とかBRICsだけではなくて、こういう比較的小さい国で我々がやってあげられること、それから彼らが我々をサポートしてくれることというのは、たくさんあると思います。そういうことがどんどん広がっていけばいいなというふうに、私は思っています。

ご清聴ありがとうございます。

## 〔質疑応答〕

早川:あまり学術的な質問ではないのですが、先生の講座では、圧倒的に女性が多いようですし、私がベトナム共産党のホーチミン支局を訪れた時も、出てきた方が全部女性でした。これは何か理由があるのでしょうか。

大喜多:結論としては、ベトナムの女性は物凄くしっかりしているといわれています。基本的には中堅どころの管理職というのは女性が圧倒的に多いです。理由はいろいろあると思いますが、ベトナム人に聞くと、ベトナムの家庭ではやはり男の人が偉いのだそうです。ですから、家庭の中でも男の子は大事にされている。女性は大事にされず、家事の手伝いなど、いろいろな仕事をさせられるので、どんどん女性がしっかりしてくる。逆に男性は何もしなくても上げ膳据え膳だから、なかなか育たないのだろうと説明してくれた女性が何人もいました。一般論として、本当の幹部になるとやはり男性が多いようですけれども、その人たちをサポートして働いている人たちというのは、基本的に女性が多かったです。ですから、女性がしっかりしているというのは間違いのないと思います。